



幡多から生まれた医師の系譜

樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人

会長
土森正一文責
寺尾敏夫

何故、幡多から極めて有能な医師達が輩出したのか！



●甲把瑞は1737年に窪川に生まれた。体躯は小さく奇才あり博學強記は及ぶものがない。

(がっぱ・ずいえき)

甲把瑞

●幡多からは江戸中期から優れた医師が数多く排出した。その端緒となった人物が甲把瑞である。甲把一族は現在全国に百八十人ほどしか確認されていない珍しい一族である。この甲把瑞の孫娘が後に樋口真吉の妻になる「兼」なのである。資料が少ないが「中村市史」から追ってみる。

●幡多からは江戸中期から優れた医師が数多く排出した。その端緒となった人物が甲把瑞である。甲把一族は現在全国に百八十人ほどしか確認されていない珍しい一族である。この甲把瑞の孫娘が後に樋口真吉の妻になる「兼」なのである。資料が少ないが「中村市史」から追ってみる。

が同門先輩に大いに推重されていたことが判る。●瑞は京都から帰省すると下田にて住み、後に中村に移って医者を開業したが何分田舎のことで人びとは彼の手腕を理解しなかった。当時の下田は中村の表玄関として海運が盛んで人口も増え栄えていた。寛政元年(1780)年土佐九代藩主山内豊雍(とよちか)が重病になり京都の名医萩野元某を招いて治療するも効なく、帰る際に「土佐には名医甲把瑞が居るのだからどうして私のようなものを呼ぶ必要があらうか」と言った。藩の役人は大いに驚き直ちに甲把瑞を呼んだ。瑞が急遽高知に向かったが須崎まで行つたとき藩主崩御が知らされ、人びと大いにこれを惜しんだという。●寛政七年下田港に琉球船が漂着した。船客石川親雲上は医を善くし積医堂といったが、たまたま病氣して医を求めたので役人は瑞を派遣した。瑞一診して薬を与え癒えることが出来た。親雲上は喜んでその秘蔵の医書を示した。



上：江戸時代、天然の良港として繁栄した下田港。
下左：初代・弘田玄仲夫妻の墓。
下右：弘田玄純篤徳(中央)、妻、および後妻の墓。(四十万市下田)



●弘田玄仲は宝暦三年(1753)高知に生まれ、後に下田に来往した。医学を修行して安永元年(1780)二十歳の時下田で開業、その後治療に出精した。当時郡内各地で痘瘡が大流行し、村民を困却させたが彼はその権威者として大いに活躍した。

弘田玄仲

(ひろた・げんちゅう)

●加持雅澄の「山齊集」に七十歳の弘田玄仲を祝う短歌が載っている。天保元年(1830)五月二十五日没、行年七十八歳。墓は下田、弘田家墓所にある。左の写真がそれである。●記録によれば寛政七年下田港に琉球船が漂着した際に弘田玄仲も下田に居て、石川親雲上との医師としての交流があったとされる。●天然痘への種痘対策は長崎に種痘が伝えら

その為幕府から十四回も褒賞せられており、文化十一年(1814)には上下二人扶持を賜り、さらに文政九年(1826)には御歩行格まで昇進している。●加持雅澄の「山齊集」に七十歳の弘田玄仲を祝う短歌が載っている。天保元年(1830)五月二十五日没、行年七十八歳。墓は下田、弘田家墓所にある。左の写真がそれである。●記録によれば寛政七年下田港に琉球船が漂着した際に弘田玄仲も下田に居て、石川親雲上との医師としての交流があったとされる。●天然痘への種痘対策は長崎に種痘が伝えら

弘田玄沖

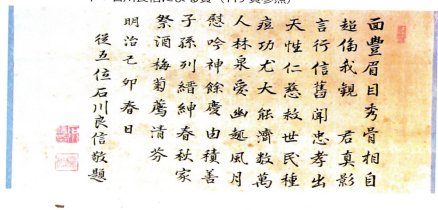
(ひろた・げんちゅう)

●二代弘田玄沖は文化元年(1804)坂本才次郎の次男として生まれ、初代玄沖の養子になる。父の名を継ぎ玄沖とも玄又とも言ったらしい。若いころ大坂の緒方洪庵の適塾に入り、緒方洪庵伝によれば洪庵塾に入門者は六百参十七人居て、土佐からは十三人の名があり、その中に弘田玄又宿毛の立田春江の名があるというから、弘田家からは玄沖、玄又の親子が学んだことになる。江戸の蘭方医戸塚静海からも種痘術を教わったとされる。

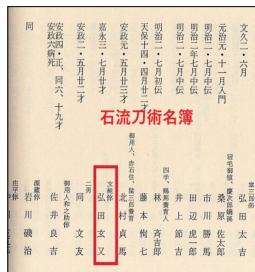
●中山礼之助日記によれば嘉永二年末から翌年五月までの間、高知城下で痘瘡による死者が二千余人に及んだと



上：弘田玄純篤徳像（作者不詳・弘田俊行氏所蔵）
下：石川良信による賛（119頁参照）



あり、玄沖も沖ノ島の
疱瘡治療に派遣されて
治療に従事したと記録
にある。
また近隣の子弟の教育
にも当たっており、あ
るいは幕府の御用で度々
江戸にも出向いて治療
に務めていたという。
●彼は元来父が賜った
扶持はそのままであつ
たが、天保五年には歩
行格に召しいだされ、
更に同十一年には一人
扶持のご加増と共に格
式御用人格に昇進して
おり、前後十八回も褒
賞せられている。その
内容たるや幡多郡は元
より南予の地域にまで
種痘を行い、その人数
は一万三千人余にも及
んだと記録にある。
●左図は弘田家に伝わ
る弘田玄沖篤徳の画で



弘田玄又

(ひろた・げんゆう)

●弘田玄又は篤徳の長男として天保三年（1832）二月十日下田に生

あり、その下に従五位下石川良信による弘田玄沖について種痘の功績と人となりを讃える漢詩が記されている。
●弘田玄沖篤徳は明治七年（1874）六月二十九日没した。享年七十二歳。墓碑は下田の弘田家墓所にある。



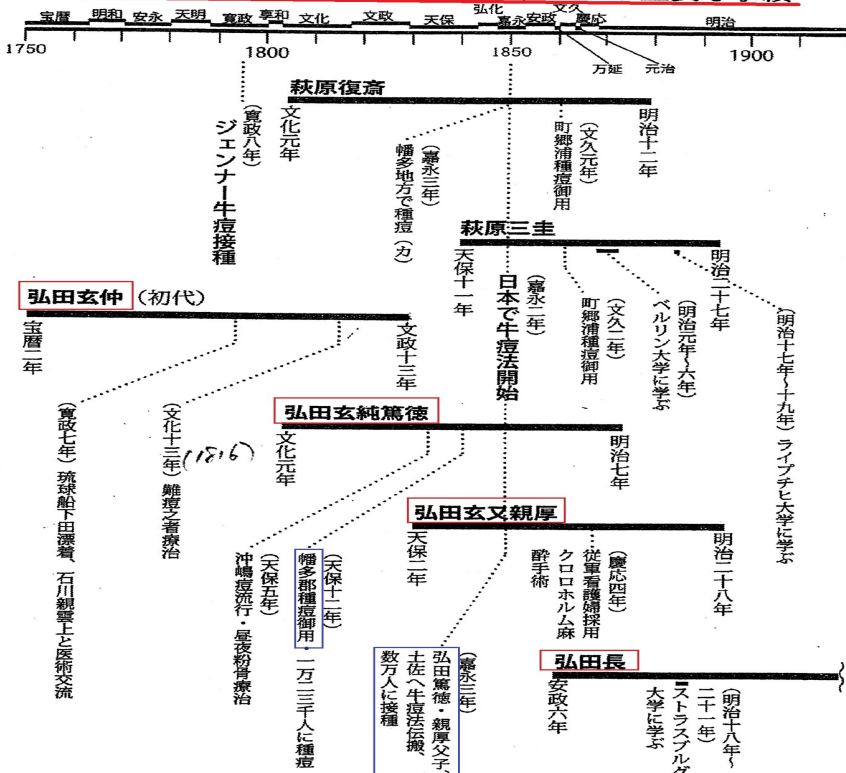
晩年の弘田玄又と親厚
出典：『壬午の医療文化史』（壬午町立歴史民俗資料館）

まれた。親厚とも云う。
嘉永六年二十歳で大坂の適塾入門、翌年華岡塾の合水堂入門して本格的西洋医学を学んだ。安政六年二十八歳の時、父の代役を願い出たところ、改めて中村御役場詰すなり幡多奉行所勤務となり三人扶持を貰った。樋口家の門人名簿に玄又の名前があるからこの時期に樋口道場に入門したと思われる。
安政七年に樋口真吉が高知へ転任になるその直前なので真吉から直に剣の指導を受けた可能性はある。その後三十歳の時更に抜擢されて高知へ召しだされ御隠居容堂公の御側医となり、御小姓組に進み五人扶持二十五石を貰っ

ている。

●戊辰戦争には東征軍迅衝隊病院頭取として十名の外科医を統率して負傷兵の手当に活躍した。戊辰戦争後は軍医としての功績により新留守居組に昇進した。この評価が後に長男の進学に大きく影響していると思われる。
●明治になると玄又は帝国陸軍の軍医として勤務する関係で兵庫県姫路市に移住した。
●適塾門下生くあまり知られていない実力者編という記事があった。適塾には福沢諭吉、橋本佐内、大村益次郎など著名な人物が学んだが、知られていない中で凄い功績を残した人物として弘田玄又がとりあげられていたのだ

萩原、弘田家の人々の生没年比較および主要な事績



「弘田玄又」土佐幡多郡下田浦生まれ。父は土佐藩医で種痘の先駆者で土佐の医師として中心人物であった。
嘉永3年（1830）適塾に入門し、約1年在籍。中之島の漢方塾・合水堂でも学ぶ。適塾の目と鼻の先にある合水堂とは犬猿の仲とよく言

われることだが、実は両方の塾で学んだ例もいくつか見られる（合水堂での華岡流外科手術の習得目的もあった）のち家督を弟に譲り、山内容堂の侍医になる。戊辰戦争で板垣退助指揮下の土佐軍に従軍し、傷兵の治療にあたり記録も残しているが日本

での初期の実例である「クロロホルム麻酔」を行い、華岡流の腕を如何なく発揮している。このころ戊辰戦争で各地の負傷者の治療に当たっていた英国人外科医・ウィリスにも教えを受けている。維新後は陸軍軍医で姫路に移り住んだ」と。

弘田 長

(ひろた つかさ)

●弘田玄又親厚三男として安政六年(1859)

中村にて生まれた。父が藩医のため六歳の時高知へ移る。十三歳の時土佐藩で三名が選ばれて東京大学医学部へ入学、以下の略歴は下記の表の通りです。

●弘田長に関しては資料が数多く残されていて彼の生涯は詳細に判っている。幾つかのエピソードを御紹介します。

■父が外科医であったので最初は外科医を専攻していたが、留学先で弘田の無類の子供好きを見た小児科医コルツ教授の奨めで小児科



出典：「弘田先生遺影」(東京帝国大学医学部小児科教室同窓会、杏林舎、昭和八年)

弘田 長

【弘田長先生略歴】

安政 6年 6月15日土佐国幡多郡中村町に出生

明治 4年 13才の時、土佐藩の貢進生に選ばれて上京、勉強を続けて東京大学医学部へ進む

明治 12年 7月(21才) 東京大学医学部を卒業して医学士の学位を得、直ちに外科当直医となる

明治 14年 12月(23才) 熊本医学学校一等教諭として赴任し、外科を担任

明治 16年 2月(24才) 同校附属医院院長を兼任

明治 17年 10月(25才) 依頼免官 ⇒ 熊本で貯めた金と祖父の援助で私費留学を決める。

明治 18年 1月(25才) 渡欧、独逸国ストラスブルク医科大学に於て小児科教授コーツ氏に就き小児科学を専攻

明治 21年 4月(28才) 帰朝、直ちに東京帝国大学医科大学小児科外来臨床講義を嘱託さる

明治 22年 12月 21日(30才) 東京帝国大学医科大学教授に任ぜらる

明治 24年 8月(32才) 医学博士の学位を授けらる

明治 39年 4月(46才) 欧米各国に派遣さる

大正 10年 11月(60才) 東京帝国大学の定年に従って退官

大正 11年 2月(61才) 東京帝国大学名誉教授の称号を授けらる

昭和 3年 11月 27日(67才) 死去

学へ転向、コルツ教授のもとで小児科医学も学ぶ。1888年4月帰国。直ちに東京帝国大学医科大学小児科外来臨床

講義を嘱託され、日本で最初の小児科が東大医学部に設立された。昭和天皇(迪宮裕仁親王)が1歳3ヶ月であつ

たとき侍医となり、迪宮がジフテリアに罹った時、「馬の血液から作った血清を使うには、明治天皇のご裁可がなければ……」と侍従が躊躇するにもかかわらず、「一刻の猶予もないのだ」と独断で血清を注射し、見事に快復させた。

■和光堂の設立

1906年(明治39年)、

和光堂の前身にあたる和光堂薬局を、東京の神田に設立した。当時の日本の乳幼児死亡率は、1000人あたり150人から160人と非常に高いものであった。なんとか乳幼児死亡率を低下させ、また子どもたちの病気を治療するだけでなく、病気を予防することにも力を入れたと考え、当時最も進んでいたドイツの育児製品を輸入し、指導販売をしながら普及させるために和光堂薬局を開局した。子供の頃シカロールにお世話にならない人はいないはずで、これも今も開発販売しているのが和光堂である。

長男が語る「長」像

○父のことについては、没後に皆さまのお心づくしにより「遺影」が刊行され、それに父のほとんどすべての全貌をつくされておりますので、「ここでは「遺影」に出ていないこと、それは、父がどうして遠く土佐の田舎からはるばる東京へ出て医学を

修業するようになったか、なぜ小児科への道を歩むようになったか、というようなことについて申し上げようと思いません。

○明治三年に時の政府から貢進生という制度が発令されました。これは明治の新政府が中央集権をねらった政策であるともいわれておりますが、それは全国から優秀な少年を選抜して東京に集め、他日国家有用の材たらしめんとする意図のもとに今日の中学、高校、大学に当る八年制の課程を習得させる制度でありました。

その選抜方法は、五万石以下の藩から一人、五万石以上の藩から二人、十五万石以上の藩からは三人の少年を選定することになっておりました。

父の住む土佐藩は、もと遠州浜松の五万石の小藩でありましたが、関ヶ原の役の勲功によって一躍二十五万石の土佐の大藩に封ぜられましたので、三人の少年を送る資格を持ち、父はその三人の少年のな

かに加えられて明治四年、十三歳の時に上京致しました。(二部省略)

○全国から東京に集った少年たちは、志望に従って東校(医)と南校(法)に分けられましたが、始めから家業の医を志した父は、神田和泉橋の東校の寄宿舎に入寮しました。(一部省略)

なお、父と同じころに南校には、小村寿太郎、鳩山和夫、穂積陳重、古市公威の諸氏がおられたもようです。

ところが明治四年に廃藩置県の法令が公布されたのを機として貢進生の制度も廃止されましたので、この制度もわずか一年余の短かい命でありましたが、父がその短期間の恩恵に浴したことは幸運であつたともいえます。

しかし、たとえこの制度がなかったとしても父のけげしい向学心は、必ずや何かの方法で父をして上京進学の道をとらしめたことと想像されます。

余談になりますが、断髪令が出たのは明治四年ですが、父はそれよ

りもずっと以前に祖父にも無断で、幼時からなじんでいたチョンマゲを切つてしまい、家人からひどくしかられたと述懐しております。

とにかく若いころの父の行動は、いつも積極的であつたようです。

○父は明治十三年に東大医学部を卒業しましたが、当時すでに文部省の海外留学生の制度がありまして、父はこれの適用を受ける資格もあり、また自分もそれを熱望いたしました。

しかし祖父が一人息子の父を遠く海外へ手離すに忍びず、父が再三の海外留学の要請も祖父の許可が容易に得られなかったもので、ついには父も「それでは私はあなたの死ぬのを待つより外はない」とまで言ったので、さすがの祖父もついに折れて、父の外遊を承諾したそうでありました。

そして父は卒業後、熊本医学校に就職して貯めた金と祖父の援助とによって、ストラスブルクに私費留学をする奇しくも親友の小金井

無類の子ども好きであり、子どもを題材にした短歌を多く残している。

幼子の遊びつかれていねしそばに母は糸くるわらぶきの家

この土上からドイツは国策の、で、のたばのりたばの領ドイツ争後普仏戦ころは学した父が留土で、した領たり返えさツとフランスの間で、取ったり、取り返えさ

同大学の小児科のコレツ教授に「そんな子供が好きな小児科をやったらどうか、一体日本に小児科があるのか」と言われて「まだ講座はない」と答える。と「それなら是非、小児科をやれ」と強くすすめられたことが、父を斯道に進めしめた動機とも考えられます。このように父の生来

○明治三十九年の秋には父は二度目の渡欧をいたしました。父の足は先ず曹遊の地ストラスブルクに向いました。十八年前の下宿のおぼさんもまだ存命していたそうです。それよりも父を一番喜ばしたのは恩師コレツ先生が健在であったことです。父がコレツ先生を

先生も父と同じ土地へ留学されたのであります。○父は大学卒業後は、助手としてスクリバ先生の下で外科を修業し、熊本医学校でも外科を担当し、当時我が国でも珍らしい舌癌の手術をしたなどと聞きましたが、ストラスブルクの大学で小児科を修業したいきさつについてあまり詳しい事は分りません。ストラスブルクというところは、昔からドイツとフランスの間で、取ったり、取り返えさ

地へ各方面の第一級の人物を派遣し、ストラスブルク大学にも世界的学者が揃っていたそうです。後に碩学として神様のような存在であったホッブゼイラー先生やウィルヒョウ教授らと父が一所に撮った写真を見たことがあります。○ストラスブルクにおける父は、生来の子供好きに加えて、故郷に残した子供等の上に思いを走せ、強い望郷心に悩んだそうであります。そして、ひまさえあれば下宿の子供らと遊んだり、下宿のおぼさんの田舎へ行って子供らと遊んだりするのが唯一の慰めであったようです。

○明治三十九年の秋には父は二度目の渡欧をいたしました。父の足は先ず曹遊の地ストラスブルクに向いました。十八年前の下宿のおぼさんもまだ存命していたそうです。それよりも父を一番喜ばしたのは恩師コレツ先生が健在であったことです。父がコレツ先生を



訪れて玄関で下嫂に刺を通ずると、二階にいた先生は階下へ下りるのももどかしく、二階の窓をあけて大声で父の名を呼んだそうです。老師は父を抱きかかえるようにして部屋に招じ入れました。「日本に帰ってから如何にして小児科の講座を創設したか、日本の小児科学の現状はなどと、コレツ先生の質問は後から後からつづぎ、そして父の答えに非常に喜ばれたそうです。膝を交えて語るこの老師弟の話は、時の経つのも忘れていつまでも尽きなかったそうであります。父はこの時の印象を語る時に、いつも楽しそ

うに話してくれました。以上申上げたことを色々総合して考え合せば、父が小児科に士心したこと、この動機のようなものが漠然と感じられるような気もいたします。思えば、これは弘田家の私事の如きものとも考えられ、それらをここで申し上げることは如何かとも思いました。が、客観的に見るときは、日本に小児科が生れた動機の一つとして多少の御参考にもなるかと存じまして申述べた次第であります。(この文章は昭和34年東大小児科10周年を記念して刊行された「東大小児科の生い立ち」の中から転載したものです。)

栄典 [編集] 弘田長の叙勲歴

- 1891年(明治24年) 12月21日 - 正七位^[8]
- 1898年(明治31年) 12月10日 - 正五位^[9]
- 1904年(明治37年) 2月10日 - 従四位^[10]
- 1914年(大正3年) 4月10日 - 従三位^[11]
- 1921年(大正10年) 12月20日 - 正三位^[12]

勲章等

- 1900年(明治33年) 12月20日 - 勲四等瑞宝章^[13]
- 1904年(明治37年) 12月27日 - 勲三等瑞宝章^[14]
- 1915年(大正4年) 12月1日 - 旭日重光章^[15]



●一段上の写真は「弘田長銅像竣工式典」と資料に書かれています。から記念式典の際のご家族と撮った写真のようです。お孫さんたちとの一枚は子ども好き

の弘田長先生らしいです。左は下田地区に今も残る弘田長邸の土塀と門柱の写真です。この写真が下田と弘田長一族との関係を示す唯一のモニュメントです。

短歌が得意の
弘田長先生

●弘田長先生は、皆さんご存じのように、東京大学小児科学教室の開設者で、同時に日本の近代的な小児科学の父といっても良い人です。退官されたのが1962年ですから、そんな大昔のことではないのですが、弘田先生の訥咳に接した人はもうほ

んどいけません。そんな医師としての弘田先生の仕事は、医局に保存してある小児科学会雑誌のバックナンバーを丹念に読めばある程度わかりますが、実際にどのような人だったのか、わかりません。亡くなられてからまだ30年くらいしかたっていないのに、ちよつと寂しい気持ちがあります。今年小児科学会の100周年記念を行いました

して弘田先生がなくなられてから5年目に弘田先生を偲んで発行された「弘田先生遺影」という文集を目にする機会がありました。厳格な先生という評判だった弘田先生でしたが、東京大学で初めて女医の入局を許可したり、育児会病院という子育て支援病院をつくつたりした社会性の豊かな先生でした。国定忠治が大好きだった弘田先生は、歌を詠むこと

を趣味にされていました。これから、弘田先生の歌を紹介したいと思えます

●冒頭の句は、断腸と名付けられたものです。亡くなった子どもの、もう持ち主のない庭くつに、本来ならば庭を駆け巡っているべき子どもを亡くした悔しさが込められているように思えます。

弘田先生時代の小児病棟は、たくさんの子供がいます。毎日常になつてゆく子どもたちとその親に対して弘田先生はたいへん同情されていたようです。

冒頭の句にそれがよくあらわれています。●弘田先生の生きた時代は、人の死が今よりずっと身近にある時代でした。子をなくした親の悲しみは、弘田先生の短歌の大きな主題でした。最初の句は、入院中の子どもを失った老いた母親の悲しむ様をうたつたものです。自分より先に逝つてはならないはずのわが子の死が、どうしても納得できない様子が伝わっ

てきます。●頑固でちよつとひょうきんなところのあった弘田先生でしたが、身近に死があるという現実、弘田先生も例外ではありませんでした。た。すでに嫁いでいた娘さんが、幼い子どもを残して大正2年に亡くなり、さらに最愛の息子さんをその5年後に失っています。息子さん

とこのどこかで自分のあとをついでもらふ心つもりがあつたのではないか、と思ひます。2首めの歌は娘さんを亡くしたときに、そして最後の2首は、息子さんへの死に臨んで詠まれたものです。●乳児死亡率が世界一低い日本では、我が子の死にめぐりあう親は少なくありません。私たち小児科医でも、自分の子どもの死を見取

くりかえしまたくりかえし逝きし子の

上ものがたる老いたる母は

年頃の似たる女の稚児いだき

道行く見ればまたも悲しき

うちそろう夕けのむしろ吾子一人

あらずなりたるにとみに悲しき

うせし子が遺しし書をえりわくる

我目うるみてみえずなりゆく

●紙面の関係で短歌の御紹介はこの辺にさせていただきます。

るといふ辛い思いをし、た人はごく少数です。受け持った子どもが亡くなつた時の親の気持ち、真に共感すること、難しい時代になつたのかも知れません。最近脳死の判定を6歳以下の子どものみで拡大するための作業が厚生省で始まっています。脳死を肯定的にとらえていた医師や作家が、自分の子どもの脳死を経験してから、次第に脳死とそれに引き続く臓器移植という考え方に疑問を呈するようになることから、現代は「死」から隔離された時代になつていっているのではないかと、なぞと思つたりします。かつては亡くなった子どもの親に共感することで完結していた医師というプロフェッションが、子どもの脳死の確認とともに、その「死体」から臓器を収獲（ハーベスト）する役を負うようになったのは、医学の進歩ゆえなのでしょう。

幡多下田から発祥した医師の系譜



江戸中期～後期の蘭方医窪川の生まれ、高知で医学を学び後に京都の吉益東同にて医学を学び、郷里に帰って下田で開業、後に中村へ、孫娘が樋口真吉に嫁した「兼」である。

高知の生まれで下田で医師として開業、郡内各地で**痘瘡が大流行**し、**彼はその権威者として大いに活躍し、幕府から十四回も褒賞**せられ、文化十一年(1814)には上下二人扶持を賜り、さらに文政九年(1826)には御歩行格まで昇進した。

坂本才次郎の次男として生まれ、**弘田玄仲の養子**になり、玄沖と称した。**緒方洪庵の適塾**に学び、当時流行した天然痘に父と共に予防に専念、**13000人に種痘を行って痘瘡の流行を防除**した。

玄仲の長男、大坂**緒方洪庵の適塾と華岡塾の合水堂**で学んだ外科医。**剣は樋口真吉の弟子。容堂公の侍医を拝命。**戊辰戦争では迅衝隊の病院頭取として負傷兵の治療に大活躍。クロコホルムによる麻酔手術を体験する。後に陸軍軍医となり姫路へ移住

父宮村源左衛門、母佐雄の4男として竹島に生まれるが、佐竹家の養子になる。後に東京に出て医師となったが、**孤児の救済を念願して保育院を作り多くの孤児を受け入れて育てた。**日本の「**保育の父**」と言われる。

幕末に**玄又の長男**として中村に生まれた。13歳で抜擢され東大医学部で学び、卒業後にドイツに私費留学して、小児科を学んだ。帰国後東京大学医学部に迎えられ**日本で最初の小児科を創設**、また小児医療の資材を販売する和光堂を設立、シッコロールを開発したことで有名。**昭和天皇の幼児期に侍医を拝命**、ジフテリアに罹った症状を見事に快癒させた。



●1864年、土佐国幡多郡下幡多郡下田竹島(現在の高知県四万十市竹島)に、父宮村源左衛門、母佐雄の4男として生まれる。1歳のとくに親戚の佐竹家に養子になり、名字は佐竹となるが、13歳の時に養父母の離婚により生家に戻って育つ。●1881年に村の小学校の助手となり、1889年に東京府下巢鴨尋常小学校長に就任するも一年後には校長を辞し、神田の明治法律学校(明治大学の前身)を経て、1890年に本郷湯島の医学専門学校(日本医科大学)を卒業し、1894年に山梨県立病院に勤務したが一年足らずで鎌倉の腰越に移って腰越医院を開設。なお、甲府での患者だった林紋治郎の夫人が熱心なキリスト教徒で、銭別として『キリスト伝』と『新約聖書』を贈られたことが入信のきっかけとなり、その後の福祉活動に繋がる。

佐竹音次郎
(さたけ・おとじろう)

●1896年、腰越医院に小児保育園を併設(親の不在を示唆する「孤児院」ではなく「保育園」という言葉を考え出した)するとともに、鎌倉在住のピーターソン宣教師、その紹介で津田仙、山鹿旗之進、内村鑑三なども接点を持った。1905年には医業を廃止して保育事業に専念、1906年には鎌倉町に新園舎を竣工し、鎌倉小児保育園と改称した。

●1913年に関東州の旅順支部と朝鮮の京城支部(1921年からは曾田嘉伊智に支部長を依頼)、1915年に台湾の台北支部を設立、1917年には台北支部に愛育幼稚園を開設した。さらに、1929年に台北支部附設託児所愛児の園を開設、1932年に関東州の大連支部、1938年に中国の北京支部を設立。

●なお医業廃止後は、主として募金(政財界人や文化人から書画の

●弘田長が中村で生まれたことが今回の調査で再確認できました。父玄又が「安政六年父の代役を願ひ出て中村の記述があり、つまり幡多奉行所詰の医師になった時、長男「長」が誕生したことが判ったのです。樋口真吉も文武館の教壇に立っていた時期で樋口道場の

編集後記

名簿に玄又の氏名があり、玄又は真吉から剣の指導を受けていたと想定されます。●弘田長は短歌が得意で多くの子供の情景を短歌で残してくれて居て人柄が偲べれます。●幕末明治期の激動の時代にこれだけの優れた医師がこの幡多の地に誇りに思っています。

寄贈を受け頒布する書画(など)を活動資金としたが、佐竹家の生活は清貧のものであった。この間、1928年に藍綬褒章を受章した。●1940年8月16日死去。在世中の院内収容実人員5571名、幼稚園託児所通園保育児5082名の規模でした。●今「保育」の言葉は保育園、保育所、保育課などと一般的に普及していますが、佐竹音次郎が創った言葉で、音次郎は「保育の父」と呼ばれています。同郷のよしみで弘田長とも交流がありました。